慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | R. Merrifield, The roman city of London, Ernest Benn |
| Sub Title | |
| Author | 小川, 英雄(Ogawa, Hideo) |
| Publisher | 三田史学会 |
| Publication year | 1969 |
| Jtitle | 史学 (The historical science). Vol.41, No.4 (1969. 3) ,p.113(611)- 115(613) |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 批評と紹介 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19690300-0113 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 批評と紹介

## R. Merrifield, The Roman City of London, Ernest Benn, London, 1965

小川英雄

ロンドンは世界三大都市のうちで最も古い歴史を持つ。即ち、西暦紀元一世紀前半にローマ皇帝 Claudius がイギリスに軍を進めた頃から、土着人の小集落であつたものが俄に都市化し、そこの後二千年間にわたつて栄えることになつた。本書はこの長期間の最初の四世紀間に関する諸研究を要約し、同時に現存する遺物・遺跡の殆んどすべてを解説したものである。

ローマ時代のロンドンの町は現在シティーと呼ばれるテムズ川左岸に面した扇状の平地にあり、多分第二世紀後半には切石積の城壁にとりかこまれた。この範囲は近世においてもほとんど変らなかつた。市内の二つの中心は現在の聖ポール寺院のあたりと、イングランド銀行のあたりの低い丘陵であり、その間を、テムズ川にそゝぐ Walbrook と云う小川が流れていた。町の北西偶には、ローマ軍の陣営があり、長方形の砦をなした（現在の Cripplegate 附近）。

しかし、当時の歴史を知ることは非常にむずかしい。なぜなら文献史料としては Dio Cassius などに散見する断片的知識以外になく、又二千年間ほとんど断絶なしに人が住んできたために、ローマ時代の地表は現在のそれよりも、一五～一八フィートも下に沈み、その上には石造やコンクリートの建造物がぎつしりたてこんで、考古学的調査を妨げている。

ところが、第二次欧州大戦による市の中心部の破壊は、埋れたローマ時代の歴史を調査する絶好の機会を与えることになつた。著者がその事情を詳しく記す通り、戦後に考古資料は質量共に飛躍的に増大した。その結果、これまで推測にすぎなかつたものが実証され、諸説紛々であつたものに一応の結論を見たと云う例は数多い。本書は学術的な研究書でもなく、考古学の報告書でもないが、シティーの考古学研究の一中心であるギルドホール博物館の副館長として永年実地にこの間の事情を熟知してきた著書が、新知識と従来の研究とを集大成し、分りやすく解説した点に意義がある。

全体は 1. Archaeology in the City of London, 2. Historical Outline, 3. The Topography of Roman London, 4. Visiting Roman London の四章から成り、多数の図版、地図及びその詳細な解説、総括的な遺跡解説、参考書目が付されている。

第一章はロンドンの発掘調査史を扱う。ローマ時代の地下遺構が最初に注目されたのは一六世紀のことであつた。それから一九世紀までは、イギリス市民社会に特有な人種 "antiquaries"

（古物愛好家）が、建築現場をめぐり歩いて熱心に遺物を集め、記録を残した。一九世紀から二〇世紀にかけては、ギルドホール・ロンドン両博物館の設立、市当局や学術団体の遺跡保存への熱意などあつて、研究が序々に統合整理され、専門化した。W. Reader et al., Victoria History of London, vol. 1, 1909 はその時期を代表する著作である。

しかし、この方面の研究が学問として厳密なものとなり、層位学的発掘によつてロンドンの地下世界が正しく解明されるようになつたのは、一九二六年に M. Wheeler がロンドン博物館長に就任してからである。彼が中心になつてまとめた Royal Commission on Historical Monuments, An Inventory of the Historical Monuments in London, vol. III, 1928 や London in Roman Times, London Museum Catalogues: No. 3, 1930 は現在も基礎文献の座を保つている。

一九四〇―五年に、ロンドンの三分の一が空襲で破壊された時、ローマ時代の研究に二度とない機会が与えられた。戦時体制下の一九四四年五月に既に市当局と学術団体がその目的のために委員会をつくつたが、それは後に Roman and Mediaeval London Excavation Committee に発展し、W. F. Grimes 教授（現在ロンドン大学考古学研究所長）の下に、戦災復興までの期間をフルに利用した組織的調査が行われた。その結果はまだ正式レポートとしては出ていないが、多くの重要な発見を含む。最も大きな成果は Cripplegate のローマ軍の陣営の解明などであるが、それ等の場所には現在、魔天楼の新オフィス街が建てられつゝある。その他、Walbrook の Bucklersbury House の再建工事現場から発見されたミトラス神殿のように、一週間余の閲覧期間に八万人以上の見物人が押しかけたと云う例もある。

第二章では、このような最新の知見をふるまえた上で、市の歴史を概観する。著者は個々の問題についての最新の議論まで簡単に紹介し、論評するが、大きなむずかしい問題（例えば、市の囲壁の構築年代とか五・六世紀のロンドンの状態）については断定を避ける。穏当な線でまとめられていると云えよう。

第三章では地形、市街、建造物などにつき考古学的調査の結果に従つて各論する。巻末の Gazetteer（解説付地名辞典）と共に著者の最も得意とする作品であり、よく整理されていて分りやすい。

第四章には現在目で見ることの出来る遺跡や博物館の案内があり、実地に訪問する際便利である。

総じて本書は純学術書ではないが、Wheeler 以後現われた最も入念で総括的なローマ時代のロンドン史であり、特に第二次大戦の戦災址の発掘調査の結果をとり入れて書かれている点では、Grimes 教授による正式報告書が刊行されるまでは重要な参考資料を提供するものと云えよう。

尚、W. F. Grimes, The Excavations of Roman and Mediaeval London, Routledge は予告されて以来久しかつたが一九六八年に出版されたらしい。又、ローマ時代のロンドン史

を扱つた本として、他に G. Home, Roman London, 1926[1]; 1948[2] がある。よい本であるが、初版が Wheeler 等の活動の直前に、再版が戦後の調査の全貌が知られる前に出されたゝめに資料的な制約があり、個々の問題で必らずしも正しくない。

その他、R. L. S. Bruce-Mitford, Recent Archaeological Excavations in Britain, 1956[1]; 1957[2] の中に、W. F. Grimes, Excavations in the City of Londonがある（pp. 111-143. ミトラス神殿については pp. 139-143. cf. J. M. Vermaseren, New Mithraic Temple in London, *Numen II*, 1955, 139 ff: J. M. C. Toynbee, A Silver Casket and Strainer from the Walbrook Mithraeum in the City of London, Leiden, 1963)。ギルドホール・ロンドン両博物館、更には General Post Office, All Hallows Church などの遺跡を訪れれば、短い説明書を得ることが出来る。又、Tower of London 内のローマ時代遺構は、その Official Guide を見ると位置が分る。本書に対する書評は、*Archaeologia Cantiana* 1966, LXXXI, pp. 257-9 (R. Jessup) にも見ることが出来る。



速水融著

## 日本経済史への視角

東洋経済新報社

長谷川恒雄

アメリカを中心として近代化論が現われ、それが新しい歴史観として日本史研究に導入され始めてから、すでに十余年を経ている。この場合、日本の近代化論とは、巨視的にいうなら、現在の日本が近代化ないし工業化に成功していることを肯定し、それを前提として、近代化のプロセスを解明する見解であるといえよう。

ここに紹介する速水教授の「日本経済史への視角」も広い意味での近代化論の立場に立ち、近世の特に経済史面に焦点をしぼり、著されたものである。読者層としては「これから経済史、特に日本経済史を勉学しようと志す学生、初学者」を予想し、著者の「ヴィジョン」と「軌跡」をのべて、読者の「学問への関心」を喚起させることを執筆の目的としている。

本書の構成をまずみてみよう。

Ⅰ　日本経済史への新しい視角

Ⅱ　近代化と封建社会

Ⅲ　「近世」社会形成の経済史的意味